紫の火花　岡潔

紫の火花

岡潔

朝日新聞社

岡　潔（おか・きよし）

1901年に生れ，1925年京大理学部数学科卒業。以後数学の研究に従事して現在にいたる。その間，1929年から1932年までフランスに留学。研究の業績に対して，学士院賞，朝日賞，文化勲章を受ける。現在奈良女子大名誉教授。

紫の火花
定　価　480円
発　行　昭和39年6月5日第1刷
　　昭和39年7月20日第5刷
著　者　岡　潔
発行者　浜名二正
印刷者　内外印刷
発行者　東京 大阪 北九州 名古屋　朝日新聞社

まえがき

満州事変の始る少し前、私はフランスへ行こうとして、シンガポールに来て、一人波打際に立った。

海岸には大きな椰子の木が一、二本、斜めに海に突き出ていて、遙か向うには二、三軒、床の高い土人の家が見える。私は寄せては返す波の音に聞き入るともなく聞き入っていた。そうすると突然、如何とも名状し難い強い懐しさの情に襲われて、時を忘れてその中に浸った。今でもこの時を思い出して、懐しさの情とはこれを言うのかと思っている。土井晩翠はここをこう歌っている、「人生旧を傷みては千古替らぬ情の歌」。

アンリー・ポアンカレーは「思想は長夜の一閃光にとどまる。されどこの閃光こそ一切なのである」と言っている。私の人生に表現せられた私の情緒を見ていると、やはり「長夜の一閃光」のように思えてくる。その閃光の中心がこのシンガポールの印象である。

この情緒の姿が真の私だとすると、私の過去も未来も、おのずから明らかであるように思える。

こういう私が、今のこのくにの世相を見ているうちに、いくばくかはこのくににいると思われる、私と同じ心の人たちに呼びかけずにはいられなくなって書いたのが、前の『春宵十話』であり、この『紫の火花』である。

「ひびきをあげよ月影に、しらべをつくる河水や、よしや林の深くして、眼には流れの見えずとも、月の光にさそはれて、夜の思を送れその琴（藤村）」

『紫の火花』という表題は、旧い友人の（といっても会ったことはないのだが）芥川に、その激しい決意の表現を借りたのである。

一九六四年春

岡　潔しるす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

まえがき 1
情緒 9
すみれの言葉 43
春の日射し 65
人生 66
絵画・彫刻 81
古棋譜 90
こころ 103

童心の世界　107
独創とは何か　113
新義務教育の是正について　147
Ⅰ　新教育に欠けているもの　151
Ⅱ　誤りの根本　181
Ⅲ　家庭教育と義務教育　193
創造性の教育　215
教育と研究の間　223
かぼちゃの生いたち　229

数学と大脳と赤ん坊 251
ロケットと女性美と古都 269
秋に思う 279
「三歳児の四割までが問題児」 279
こころ 282
知性について 286
夢 292
遊び 297
能力の柔軟性 302

春の水音 305
月ヶ瀬 305
結婚式 310
カルタン氏の訪日 314
箱庭 317
わが座右の書 321
あとがき 323

紫の火花

装幀·原　弘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

情　緒

『春宵十話』でとりあえずお話したことを詳しくご説明しておきたいと思うのであるが、それには非常な難関がある。「情緒」を説くことがそれである。これについて私には自信はとうていないのだが、それをしなければ、私が本当に言いたいことは何一つ言えないことになってしまいそうであるから、押切って出来るだけやってみることにした。

1

芭蕉も漱石も滝を句によんでいる。ちょっと比べてみよう。

ほろ〳〵と山吹ちるか滝の音　芭蕉

荒滝や満山の若葉皆な振ふ　漱石

芭蕉の句はちょっと武陵桃源という気がしますね。これは情緒の調和である。これに対し漱石の句は、帖木児北征の巷説に大明国が震撼したことを連想するでしょう。これは物質の運動である。芥川（竜之介）は私に芭蕉の句の「しらべ」を教えてくれた、（「芭蕉雑記」「続芭蕉雑記」、岩波版全集、第六巻）。その芥川さえこう言っている、「だが芭蕉の奥に何があるのだろう」。しかし私は、芭蕉の奥に入ってこそ「創造」というものがわかってくると思っているのである。情緒という大河を越えなければそこへは行けない。

私はこころと言うと、何だか色彩が感じられないように思ったから、「情緒」という言葉を選んだのである。「春の愁ひの極りて春の鳥こそ音にも鳴け」と佐藤春夫は歌っているが、何もこれだけがそうではなく、情緒は広く知、情、意及び感覚の各分野にわたって分布していると見ているのである（この言葉の内容をそう規定しているのである）。

私たちは明治以後、西欧の文化を取入れて大体その中に住んでいる。それからわずか百年位にしかならないのに、私たちはそれまで長い間絶えず身近に感じてきたものを、もうほとんど忘れてしまったようにみえる。

こんなことがあった。去年の十二月初めのある朝、私は四、五十分かかる電車の中にい

た。そしてこんな問題を考え続けていた。キーパンチャーには普通若い女性がなるが、よく自殺をする。キーをたたくことがなぜ自殺したくなる原因になるのだろう。全く不思議である。しかも、この問題は非常に重要である。なぜなら近ごろの教育はだんだんキーをたたくことに似てきているし、社会人の生活もそうであるから。

しかしどうもわからない。大体、生きるとはどういうことだろうか、と思った。小学校の先生はどういう例を使って生きるという字を教えているのだろう。「みみずが生きている」——これは物質の運動である。「生命保険」——これは肉体という物質にかけた保険である。「生物」——これは複雑な物質が複雑な変化をするということである。すべて物質現象であって、生きるという字を使わなくても言いあらわすことができる。では、生きるという字はいらないのだろうか。

この辺まで考えてきたとき、ふと窓外に目をやると、満目ただ冬枯れている中に、緑の大根畑だけが生きていた。知らず知らず、今日の小学校の先生になってしまっていた私は、ハッと平生の私に返って、アッこれだと思った。この緑の大根畑は「情緒」である。「頬が生き生きしている」「日々生き甲斐を感じる」——みな情緒が生きているのである。

電車はそのうちに山茶花の木でおおわれている小さな墓の前を通った。見慣れた墓である。山茶花はもう残っていなかった。私はふと、丈草か誰かの「陽炎や墓より外に住むばかり」という句を思い出した。自分の言うことを誰もわかってくれないが、もし親が生きていたら、というようなことがよくあるだろう。「わかる」とはどういうことだろう。考えはこの新しい問題に移って行った。初めの問題とごく近いという気のする問題である。

また小学校に返るが、先生が山とか川とか木とかを教えるとき、例をもって教える。児童のこのわかり方は、「感覚的にわかる」のである。「形式的にわかる」と言ってもよい。もう少し深くわかるのは、意味がわかるのである。これを「理解する」という。しかしここにとどまったのでは、いろいろの点で不十分である。まず知的に言って、進んで「意義」がわかるまで行かなければいけない。でないと、えてして猿の人真似になってしまう。意義がわかるとは全体の中における個の位置がわかるのである。だから、全体がわからなければ何一つ本当にはわからない。このわかり方は言わば心の鏡に映るのである。

しかし、今言おうと思っているのはそれではない。たとえば他の悲しみだが、これが本当にわかったら、自分も悲しくなるというのでなければいけない。一口に悲しみといって

も、それにはいろいろな色どりのものがある。それがわかるためには、自分も悲しくならなければ駄目である。他の悲しみを理解した程度で同情的行為をすると、かえってその人を怒らせてしまうことが多い。軽蔑されたように感じるのである。

これに反して、他の悲しみを自分の悲しみとするというわかり方でわかると、単にそういう人がいるということを知っただけで、その人には慰めともなれば、励ましともなる。このわかり方を道元禅師は「体取」と言っている。ある一系のものをすべて体取することを、「体得」すると言うのである。

理解は自他対立的にわかるのであるが、体取は自分がそのものとなることによって、そのものがわかるのである。道元禅師は

聞ままにまた心なき身にしあらはをのれなりけり軒の玉水

と言っている。

人の上にはこういうことをする智力が働いている。古人（明治までの人）はこれを真智と言った。前にのべた意義までわかるのも、今言った体取も、皆この真智の働きである。前のような働きを大円鏡智、今言ったようなものを妙観察智と古人は名づけている。

私には孫が二人ある。二人とも長女の子である。上は十一月生れで六つ（年はすべて数え年である）、下は二月生れで二つである。以前は私の家にいたが、今は二時間半ほどの距離にいる。それで私には、彼らが内面的にどう生いたってゆくかを正確に描写することはできないが、上の孫はもうカジを取ってやらなければならない時期なので、両親がそれを巧くやっているかどうかを時々見にゆくことはできる。数日前にも一度行ってきた。その孫はこの四月から幼稚園へ行っているので、私はその様子を見に行った。その時の話である。

園長さんは真言宗の尼さんで、本尊さまは観音さまである。その尼さんは朝は観音経を、夜は般若理趣経を上げておられる。それを聞いたので私はこう言った。「小さな子に花の美しさがよくわからないのは、頭の、美しさのわかる部分がまだよく発育していないためではなく、心をその花に注ぐ力が弱いからである。こころを花に集めることができさえすれば、大自然の真智はその心の上に働いて、その子にはその花の美しいことがよくわかるのです」（大自然というのは言わば奥行を持った自然というくらいの意味である。だから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com